

日本史

第 1 問 設問A→赤色 設問B→水色

10 世紀から 11 世紀前半の貴族社会に関する次の(1)~(5)の文章を読んで、下記の設問 A・B に答えなさい。解答は、解答用紙(イ)の欄に、設問ごとに改行し、設問の記号を付して記入しなさい。

- (1) 9 世紀後半以降、朝廷で行われる神事・仏事や政務が「年中行事」として整えられた。それが繰り返されるにともない、あらゆる政務や儀式について、執り行う手順や作法に関する先例が蓄積されていき、それは細かな動作にまで及んだ。

年中行事を細かなところまで同じ形式で繰り返すように

- (2) そうした朝廷の諸行事は、「上卿」と呼ばれる責任者の主導で執り行われた。「上卿」をつとめることができるのは大臣・大納言などであり、また地位によって担当できる行事が異なっていた。

執り行う行事に身分が関係
→高い身分ほど重要な行事を行う

- (3) 藤原顕光は名門に生まれ、左大臣にまで上ったため、重要行事の「上卿」をつとめたが、手順や作法を誤ることが多かった。他の貴族たちはそれを「前例に違う」と評し、顕光を「至愚(たいへん愚か)」と嘲笑した。

先例に倣って行事を行える
かが本人の評価に直結

- (4) 右大臣藤原実資は、祖父左大臣藤原実頼の日記を受け継ぎ、また自らも長年日記を記していたので、様々な儀式や政務の先例に通じていた。実資は、重要行事の「上卿」をしばしば任されるなど朝廷で重んじられ、後世、「賢人右府(右大臣)」と称された。

日記は先例を受け継ぐ
手段として有効

先例に通じる

朝廷で重用されるように

- (5) 藤原道長の祖父である右大臣藤原師輔は、子孫に対して、朝起きたら前日のことを日記につけること、重要な朝廷の行事と天皇や父親に関することは、後々の参考のため、特に記録しておくことを遺訓した。

設 問 10世紀から11世紀前半

A この時代の上級貴族にはどのような能力が求められたか。 1行以内で述べな
さい。

字数制限が厳しいことに注意

問題文中で言うところの「上卿」

B この時期には、『御堂関白記』(藤原道長)や『小右記』(藤原実資)のような貴族
の日記が多く書かれるようになった。 日記が書かれた目的を4行以内で述べな
さい。

主題